きみが住む星

池澤夏樹

photograph by ERNST HAAS

きみが住む星

池澤夏樹

photograph by
ERNST HAAS

きみが住む星

一九九二年十月二十五日　第一刷発行
文　池澤夏樹
写真　エルンスト・ハース
発行者　大沼　淳
発行所　文化出版局
〒151　東京都渋谷区代々木三―二一―一
電話　〇三(三二九九)二四九二(編集)
〇三(三二九九)二五四二～八(販売)
振替　東京二―一九五六七〇番
印刷所　日本写真印刷
製本所　小高製本工業

© Natsuki Ikezawa & Ernst Haas 1992　Printed in Japan

きみが住む星

池澤夏樹

photograph by
ERNST HAAS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

きみが住む星

目次

最初の手紙 6
朝焼けコレクター 10
花を踏まない馬 14
風景を洗う 18
向こう側へ行く人たち 22
魔法使いの家 26
考えが走る 30
ゆっくりと飛ぶ鳥 34
蛍の木 38
夜間飛行 42
フラミンゴたち 46
心のガラス窓 50

パピルス 54
宝を探す人々 58
海から逃げる光 62
大事なものは空に 66
丘の上の家に住む日 70
あふれ出した鳥 74
最後の馬車 78
長い長い物語 82
雪迎え 86
神さまの本当の名 90
ワンピースの化石 94

最初の手紙

とうとう旅に出てしまった。

きみのもとを離れて辛いという気持ちと、はじめた以上はきちんと最後までやりとげて帰ろうという気持ち、その間ずっと一人で待っているきみへの思い、先の不安、いろいろな気持ちが心の中で勝手にあばれまわっている。こんなに長い間ふたりが別々に暮らすなんて、初めてのことだから。

最後に空港できみの手を握って、抱き合って、別れた後、飛行機に乗った時、離陸して高く高く上がり、群青の成層圏の空を見た時、ぼくはこの星が好きだと思った。それから、どうしてそんな気持ちになったのか、ゆっくりと考えてみた。飛行機の中って、時間がたっぷりある

からね。そうして、ここがきみが住む星だから、それで好きなんだって気がついた。他の星にはきみがいない。

考えてみて。きみ一人を地面の上に立たせて、足を地面がしっかり支え、風が髪の毛の間を吹きぬけ、明るい日差しがきみの顔を照らすために、いったいどれだけの時間と偶然が必要だったか。地球がもう少し冷たくても、あとわずか乾いていても、紫外線がもうちょっと強くても、きみはいなかった。何かが少し変わっただけで、きみが見上げる白樺の葉は繁っていなかっただろうし、きみが食べるオレンジも実をつけなかった。雪が降る光景をきみは見ることはなく、ぼくがきみの髪に触れることもなかった。大好きなその髪。かぎりなくたくさんの条

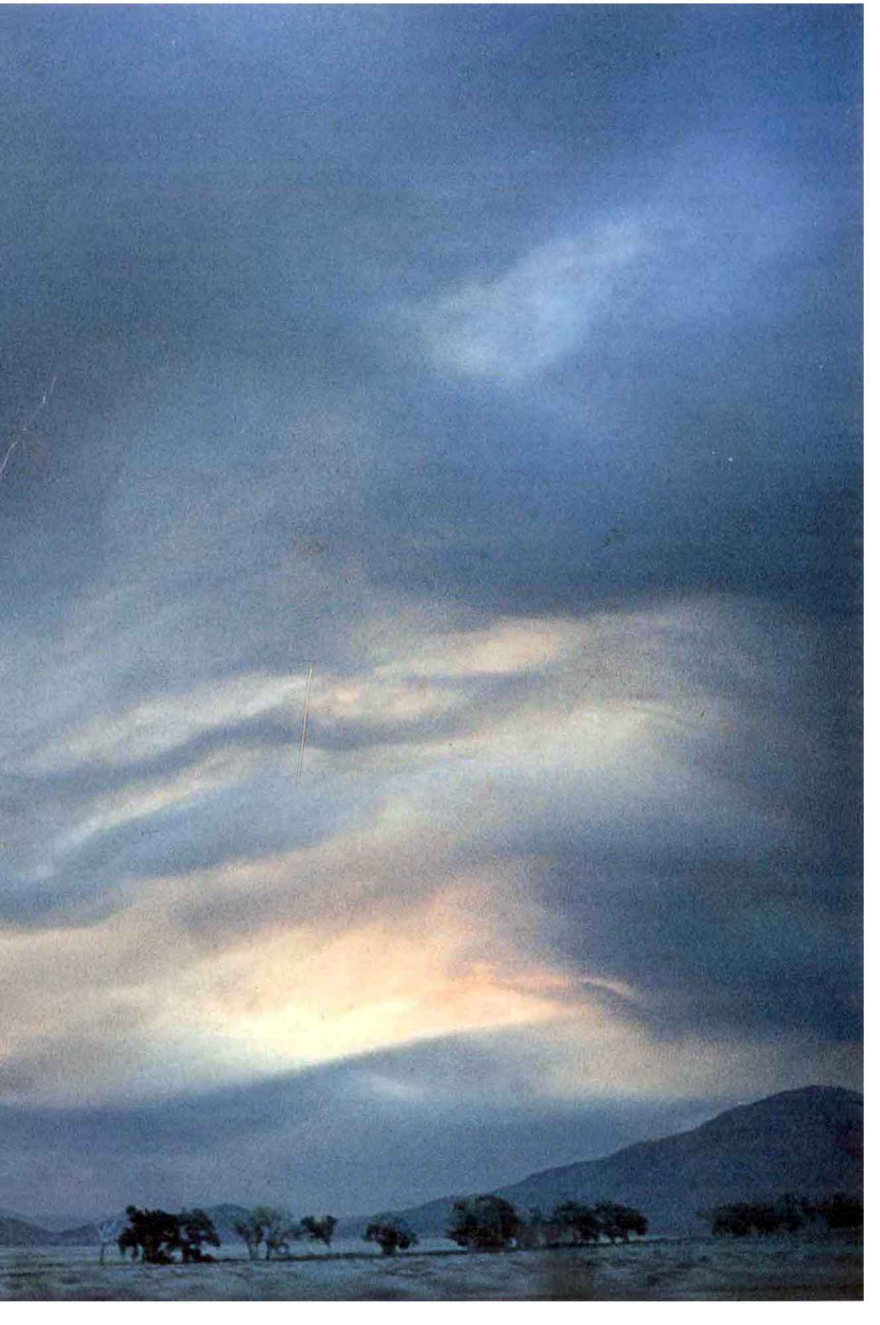
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

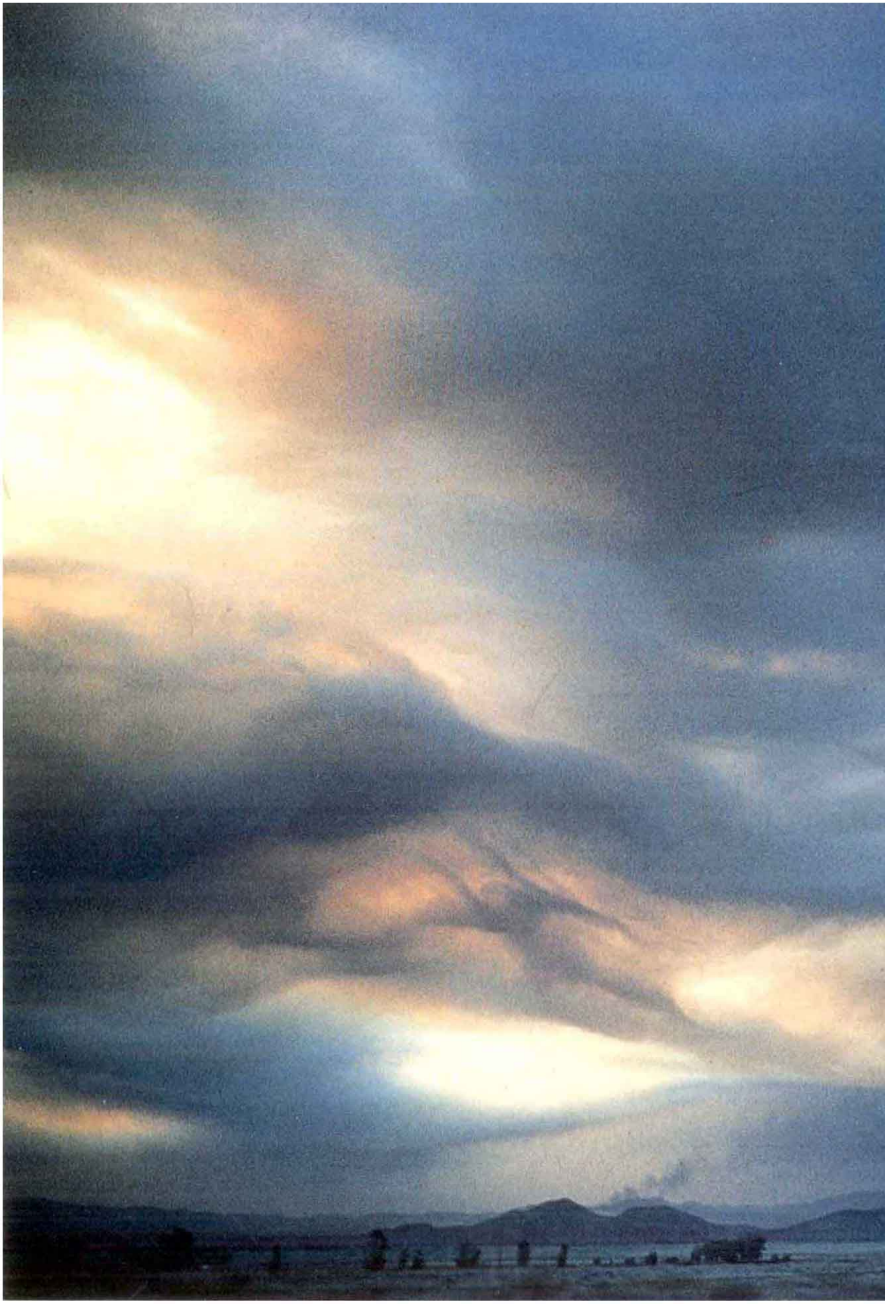
件をひとつ残らずクリアして、そしてきみがこの星に住むことになった。

その星のあちらこちらをぼくは見にゆくのだと思った。行く先々でぼくは風景や人々の中にきみのおもかげを見るだろう。それをきみに報告するだろう。そういう形で、ぼくはきみへの思いを伝える。きみはぼくの目を経由した自画像をたくさん受け取るだろう。旅をしているのが自分であり、見られている風景が自分であり、この星全体が自分なのだと知るだろう。

そういう気持ちでいる。不安だけど、わくわくしている。手紙を待っていて。ぼくが帰る日を待っていて。

バイバイ





朝焼けコレクター

元気かい？　ぼくは元気で旅を続けている。

ぼくの友だちの朝焼けコレクターのこと、まだきみに話していなかったと思う。彼は朝焼けを見るのが趣味で、あちらこちら綺麗な朝焼けを集めて歩いた（夕焼けは下品だと言って、見向きもしない）。写真に撮るわけじゃない。全部おぼえてしまうんだ。だから、気が向くと、一九八二年三月二五日のナミブ沙漠とか、八八年九月二〇日のポート・モレズビーとか、自分が見た優れた朝焼けの一つ一つについて、詳しく話してくれる。どういう形の雲がどうたなびいて、そこにどう日が昇ってきたか。

空の色、星の消えかた、風の声、等々。

しかし、彼はある時、アンデスの山の上から特別すごい朝焼けを見た。それまでに見たのを全部足してもとても足りないほどの偉大な朝焼け。それにすっかり圧倒されて、彼はコレクションをやめたんだ。一生の分をその朝に見てしまった気がしたと言って。

ぼくが今朝見たのは、そんなにすごくないけど、でもなかなか綺麗だったよ。

また書く。

バイバイ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c